
嘘つきは誰だ

七緒 湖李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘つきは誰だ

【コード】

N9030Y

【作者名】

七緒 湖李

【あらすじ】

ひよんなことから学校で大人気の女の子に告白することになった男子高校生の話。

ムーンで掲載中の連載小説が書けない状態なので、なんとなく浮んだこの話を書くことにしました。

「安在さん。突然で驚くと思うけど好きです。俺とつきあってください」

高3の初夏。

受験生の俺がなぜ学年一美人と名高い彼女に告白しているのかというところ。

「航平（こうへい）、仇とつて仇！」

幼馴染みの泰治（やすはる）に泣きつかれたのは今日の昼休みのことだ。

泰治とは幼稚園から一緒に小学生の頃まで毎日のようにつるんでいたが、中学からは疎遠になり同じ高校に進学したはずが、その頃には話をすることもなくなっていた。

高3で数年ぶりに同じクラスになって、また話をするようになった泰治が、ずっと密かに片想いを続けていたらしいと知って俺は単純に驚いた。

女の子に興味があつたのかと。

いや別に変な意味じゃない。

昔は女の子より仲間と遊ぶ方が好きだったという意味だ。

泰治が片想いしていたのは隣のクラスの安在雛姫（あざひなひめ）。

俺も彼女は知っている。

茶色のふわふわの髪や肌の白さは異国の血を引いているせいだとか、そのせいかスタイルがよく特に胸がでかいだとか、これからの体育

の授業が水泳に変わるのが楽しみでならないだとか。
ともかく男の邪心……ではなく憧れの的の彼女は文句なくきれいだ。
しかも彼氏がいない。

とくれば男が放っておくはずもなく彼女はすこぶるモテていた。
泰治もその一人だったようだ。

またすごいところに手を出したなと思いつつも俺は尋ね返す。

「仇？」

「見下すような顔されて無理って　ひどくね？あんな子だと思わ
なかった。男の純情踏みにじりやがって」

屋上で食後の苺ミルクを飲んでいた俺は、隣にいた巽たつみと顔を見合わ
せる。

「泰治、安在が告ってくる男を振るのはいつものことだ」

俺がズズ〜と紙パツクの中身を飲み干し言つと巽も頷く。

「それはもはやこの学校の七不思議のひとつ　」

「にはなつてねえから！」

俺が素早く突っ込みを入れると巽は、済ました顔で読みかけていた
少年漫画に視線を落とした。

泰治と疎遠になったかわりに中学から仲良くなった巽は、ちよつと
変わり者だが俺の親友だ。

面倒臭がりで何を考えているかわからないところもあるのに、なぜ
かこいつといる時が一番楽だった。

巽と同じクラスで俺は休み時間こいつの他、数人の友達と過ごす。
泰治とはこれまでの空白の数年のせいか、つるむことはなくなつて
しまった。

が、こんなふうになるときおり話しかけてきたときのなつっこさは昔の
彼を思い出す。

「で、木戸君。航平に仇とつてつてどういうことですか？」

漫画から顔もあげずに巽が促すと泰治は一瞬ムツとしたような顔を

した。

(巽、人と話すときはせめて顔あげる)

しかも敬語を使ったことで、どうやら泰治には馬鹿にされたように聞こえたらしい。

巽を無視して俺に懇願するよう言った。

「航平っ。安在をおまえに惚れさせてそのあとこっぴどく振ってくれ」

「はあ!？」

「俺が味わった屈辱を彼女にも味わわせてやるんだ。大丈夫、おまえ面はいいから女が好きそうな甘い言葉吐いて誑かせば絶対落ちるって!」

「や、俺、無理だっ。ていうかおまえ、仮にも好きだった子に対して」

これって世間的にはこう言うんじゃないか？

「最低だね、木戸君。そういうの逆恨みって言うんですよ、そう、それだ。」

逆恨み。

巽が棒読みで言うつと。ピクと泰治は眉を釣り上げた。

「成山、さつきからおまえうるせえよ。俺と航平の話に口挟んでくんな。この漫画オタクが」

そして俺に向かって猫なで声を出してくる。

「頼むよ、航平。俺とおまえの仲じゃん」

「いやだ」

「冷たい」

「この件に関しては冷血漢でいい」

「ふーん、そんなこと言っているの？おまえの過去学校でバラすぞ？」

泰治の言葉に俺はギクと顔を強張らせてしまった。

逆に泰治はニヤリと俺に向かって笑う。
ちくしょう、こいつはアレを知ってるんだった。

「……わかった。とりあえず放課後、安在に告る」

「え？おまえに惚れさせてからじゃねえとさあ」

「心配しなくても俺と彼女は既に顔見知りだ」

隣のクラスだから彼女も俺の顔ぐらいは知ってるはずだろう。

そういう意味での顔見知りだが真実は黙っておく。

「ふうん。やっぱおまえってそういう奴だよな」

「そういう？」

「顔が広いつつってんだよ。昔っからそうじゃん？んじゃ頼りにしてるぜー、西嶋航平君」

にこやかに泰治が屋上からいなくなったところで、巽がパタンと漫画を閉じて俺に目を向けた。

じいっと見つめてくる目に責められているようだ。

「航平、木戸にどんな弱み握られてんの？」

「え？」

逆恨みした男の復讐を手伝うなんて、てっきり軽蔑されたかと思っていた。

「俺、航平と友達になったの中学からだからそれ以前のことだよな？小学校の頃の話？」

「言いたくない」

「実は小学校の影の支配者だったとか？」

「言わないって言うてんだろ」

「そこまで言いたくないの？じゃ聞かない。そろそろ昼休み終わるし教室戻る？」

漫画片手に立ち上がる巽を追って横に並びながら俺はつい尋ねてしまった。

「とめないのか？」

「うん。だって俺、木戸って嫌いだし関わりたくない。自分でなんとかしてね」

「嫌いつて……はつきり言うなあ」

「航平の友達みたいだから黙ってたけどちよつと限界。さっきのあれ、全世界の漫画好き敵にまわしたよね、彼」

「もしかして漫画オタク発言にキレた？普通、逆恨みの方を気にしないか？」

「そこはもう男としてどうかというレベルでなく人間として終わってるよね」

階段を降りつつ巽が抑揚のない声で言う。

こいつは普段から淡々とした口調で話すからいまいち感情が読みにくい。

けど人として終わってる発言はかなり辛辣だから、相当泰治のことが嫌いなのだろう。

実際俺もあいつのやろうとしていることは理解できない。

「昔はあんなじゃなかったんだけどなあ」

「時間の流れつてときに無情だよ」

トンと廊下に降り立った巽は俺を振り返った。

「航平が本気で困ったら言うてね」

「心配してくれんの？」

「うん、ちよつと」

「ちよつとかよ」

脱力した俺が教室に向かって歩き出すとちよつとチャイムが鳴り始めた。

「嫌な感じだったから」

「ん？なんだつて？」

チャイムのせいで巽の言葉が聞こえなくて尋ね返したが返事はなか

った。

* * *

そして放課後、俺は隣のクラスの安在雛姫を第2校舎裏に呼び出した。

昇降口にある下駄箱にメモを入れて呼び出す古臭い手だがうまくいったようだ。

泰治は物陰に隠れて俺たちの様子を見ているはず。

俺は安在に告白してすっぱり振られるつもりでいた。

そもそも今日まで話をしたこともない彼女に告ったところでうまくいくはずがないし、ここで俺が泰治と同じ目に合えばあいつも同類ができて逆恨みなんてやめるだろう。

熱気を孕んだ風はこれからくる夏を思い起こさせる。

大音量の蝉の鳴き声、うだるような暑さ。

考えるだけでうんざりしたくなるが、この風に揺れる彼女の髪は軽やかでどこか涼しげに見えるから不思議だ。

柔らかかそうな髪だなあと思いつつ俺は安在の顔を見て正直引いた。

なんか俺、すんげえ睨まれてるよな。

これが泰治の言ってた見下しってやつか。

じゃあこのあと俺は「無理」って振られるわけだ。

よし、こいつ。

「あの、西嶋君？」

突然呼びかけられた俺は彼女が近づいてきたためどきまぎした。

「本当に？」

俺を見上げてくる目が……さっきより怖いのはなんでだ。

目を細めて睨まれると美人なだけに迫力がある。

「本当につて、えーっと確かに俺らあんまり話したこともないけど

—

というより話をしたのは今日がはじめてだけだな。

そんな俺から「好きです」って言われても信じられないのは当たり前だろう。

「3年2組西嶋航平君」

クラスとフルネームを言われて俺は「はい」と思わず返事をしていった。

瞬間、彼女は飛びのくように後ろに後退る。

近づいたり離れたりつてなんだ、このおかしな行動は。

しかもなんかぶつぶつ言ってる。

もしかして行動が挙動不審な上、電波と交信でもするイタイ人だったかと俺は身構えた。

だがよくよく聞けば「どうしよう」とか「やっぱり無理かも」と言っている。

無理でいいんだ。

ここは素早く瞬殺してくれ。

「安在さん？」

「あ、はいっ。なんでしよう？」

顔をあげた安在がまたしても俺を睨む。

目つきは怖いのに敬語つて変だな。

「や、なんでしようじゃなくて……俺、返事聞いていいかな？」

「そ、そうですね。すみません」

「すみません」の言葉に俺は安堵の息を吐いた。
「無理」ではなかったがきっぱり断ってくれたようだ。

「ああ、うん。やっぱりそうだよな」

「よろしくお願いします」

「突然呼び出して……ん？安在さん、いまなんて？」

「よろしくお願いします？」

一瞬、俺の思考が停止した。

そしてすぐに活動を再開する。

二度「よろしくお願いします」が聞こえた気がするが。

俺は額に手を当てて首を振った。

「聞き間違いだな。もう一回聞いていい？」

俺の質問に彼女は頷く。

制服のスカートを揺らしながらペコンとお辞儀がついていた。

「今日からよろしくお願いします、西嶋君」

俺、彼女ができたんだろうか。

しかもこんな美人の女の子。

……いいや！ちよおと待てー！！

こんな展開、俺は望んでいない。

誰か嘘だと言ってくれっ。

これは夢だ、これは夢だ、これは夢だ。
夢夢夢。

昇降口で念仏のように繰り返していた俺は、
「お待たせしました、西嶋君」
という可愛らしい声に頭を抱え込みたくなった。

告白から数分後。

俺は安在と一緒に帰宅することになってしまった。
「せっかく彼女になったんですから恋人同士っぽいことがしたいです」

意外な言葉にポカンとする俺をよそに、彼女は昇降口で待っていて
くださいと教室にカバンを取りに行ってしまった。

俺は振られてすぐに帰宅するつもりだったから、荷物はばっちり持
参していた。

状況が飲み込めないまま、安在に言われた昇降口に向かう俺の前に
巽が姿を現す。

「祝、初彼女」

言いながら右手を胸の前にあげるのはタッチでもしろってか。
嬉しくもないのになんでそんなことしなきゃいけないんだ。

「おまえまで見てたのか。ってか泰治は？」
右手をわきわき握っていた巽は、無理やり俺の手にタッチしてから
校舎のほうを指差した。

「悔しそうな顔で走ってったよ。まさかうまくいくとは思ってなかったんじゃない？男の嫉妬って醜いよね」

「俺だつてOKされるなんて思ってたよ。いまさら冗談ですついたら怒るかなー、やっぱり」

「いつもみたいに冷たく捨てるっていうのやればいいんじゃない？」

「人が聞いたら誤解を生むようなこと言うなっ！んなことしたことはないわつ。今日まで告白したこともされたこともないっつうの」

「航平って損してるよね、いろいろと」
溜め息混じりに巽に言われて眉を寄せる。

本当、こいつはたまによくわからないことを言う。

「泰治の前で俺も振られれば同類相憐れむっつうか　それで逆恨みしなくなってくればって思ってたんだよ。なのに……安在って何考えてんだ？あれだけ俺のこと睨んどいてつきあうってわけわかんねー」

「女心と秋の空っていうでしょ。じゃ俺はこれで。今日から航平は安在さんと帰るんだろうし、俺は一人寂しく帰る」

「え？ちよつと待て、巽」

ヒラリと手を振った巽を呼び止めても立ち止まってくれなかった。

かくして俺は昇降口で安在を待って……そして現在に至る。

隣のクラスの彼女の下駄箱は俺のクラスの下駄箱の向かいだ。

上履きから靴に履き替える彼女を落ち着かない気持ちになりながら見ていた俺は、靴を履きかけた彼女がいきなり息を飲んで慄いたのでぎょつとした。

「どっかした？」

「に、にし、西嶋君……むむ、む」

はい？

わけがわからず近づくと俺は安在が指差す床を見た。

スノコと彼女のローファーがあるだけだ。

「靴がなに？」

「む、虫、靴で潰しちゃった」

「え？虫？」

「その緑色の長い芋虫……。虫苦手で靴を触れない」

え、芋虫を靴で潰した？

靴に潰れなかった部分が蠢いてたらそれは俺もちょっと引く。

屈みこんで靴を覗き込んだ俺はつい笑ってしまった。

「もしかして目悪い？これ、虫じゃなくて毛糸」

俺が薄汚れた黄緑色の毛糸を摘み上げると、彼女は目を細めてそれを見つめ、やがてホツとしたように息を吐いた。

近くにあったゴミ箱に毛糸を捨てる俺は、安在が睨んできていた理由がわかって彼女を振り返った。

「眼鏡、持っていないの？」

「あります」

「じゃ、かければ？さっきまで俺、睨まれてるのかと思ってたし」

「え？睨……。ご、ごめんなさい。コンタクト、片方なくしてしまつて週末に新しい物を作りに行くつもりですから」

「うん。でも眼鏡かけないと危なくないか？目、かなり悪いんじゃないの？」

頷く安在はごそごそとカバンを探りケースから眼鏡を取り出すと、俺から顔を隠すようにそれをかける。

「なんで顔隠すわけ？」

「似合わないから」

「はあ？もしかしてそれが眼鏡かけてない理由？」

「すみません」

そう言つて俺を見た彼女の顔に淡いポルドー色の眼鏡がかかる。

「いつもと違って優等生っぽくなるけど別に变じゃないじゃん。や

つば怪我したら危ないしコンタクト買つまでかけてるほづがいいつて。日常生活に支障きたしてるだろ、安在の場合」

「……呼び捨て」

「へ？ あつ、ごめん、つい。安在さんでした」

「呼び捨てがいいです。でも、できれば名字じゃなくて名前……雛姫って」

言いながら安在の顔が赤くなる。

なんでそこで赤くなる？

つてか、うわなんだこれ。

こつちまで照れるつて。

「名前……？いや、いきなりハードル上げすぎ。そこは安在で。それから安在も俺への敬語やめて。同い年だし」

「うん、わかった」

はにかみながら頷かれ、俺は彼女を直視できなくなった。

「かわ」

掌で口をおさえ無意識に言いかけた言葉を塞ぐ。

しかし彼女に聞こえてしまったようだ。

「カワ？」

見上げてくる目に問われて心臓が口から出るかと思った。

よかった、手でおさえていて。

本当に彼女は俺と同じホモサピエンスか？

いや違うだろう。

こんな可愛いのに絶対俺と同じじゃない。

とにかく落ち着け俺。

「や、なんでもない。それより俺、電車通んだけど安在は？」

「わたしも」

「そ。んじゃ帰ろう」

並んで歩きながら俺は全力で後悔し始めていた。

安在は泰治が言うような男心を踏みにじるような嫌な女じゃないと思う。

裸眼じゃよく見えなくて目を凝らした彼女の眼差しを、あいつは見下されたと勘違いしたんだ。

きつと告白を断られたショックで彼女を悪者にしてるんだろう。

そんな泰治の逆恨みをやめさせるためとはいえ、軽い気持ちで安在に告白した俺って最低じゃないか？

しかも安在をよく知らなかったときは観賞用と興味すらなかったくせに、実際の彼女を知ったとたん可愛いとか思ってるなんて、俺はどれだけ現金な奴なんだ。

ここは正直に真実を話すほうがいいんだろうか。

ちらと安在を見下ろせば、肩下で揺れる軽やかな髪や長い睫、少し赤みがさす頬なんてのが、いちいち俺を魅了する。

観賞用フィルターがなくなっただけ、俺の目は彼女のまぶしさに耐えられないみたいだ。

これじゃ安在を見て話ができない。

しばらくすれば彼女を見慣れるだろうし、その時にすべてを話そう。大事な話をするときは相手の目を見てするのが礼儀だ、うん。

「西嶋君、なに、かな……？」

俺の視線に安在は気づいたらしい。

まあ二人して話もせず黙々と歩いていけば、ガン見に気づかれて当たり前か。

「えー……」

言葉を探したけど結局何も見つからず首を振る。

「なんでもない」

「……もしかして、つまらない？」

「へ？」

「わたし、話もしなかったもんね。き、緊張して何を話したらいいか　あつ、でも緊張って言っても困ってるとかじゃなくてね。男の子とこうやって並んで歩くとか初めてだから……って、あああ何言ってるんだろう、わたし」

お約束どおりそこで恥ずかしそうに頬を赤くするのか。

いやもう、どんだけピュアなんだって話だな。

安在を陰で遊んでそうって言ってニヤけてた野郎がいたが、あいつらに鉄拳食らわしたい。

「話って別になんでもいいと思うけど。昨日、何した。どんなテレビ見た。こういうのに興味ある。……そんな感じで。はい、どうぞ」

「え？わたしから話題を振るの？じゃあ一言ですまさないで話題を膨らませてね」

「努力します」

「なんで敬語なの……わたしが使うのヤダって言ったくせに」

あ、ちよつと拗ねた。

こんな顔もするのか。

「話してんじゃん、俺たち。無理しないでこんなんでいいんじゃないの？ずーつと話してなきゃいけないってわけでもないし、沈黙になつたときは別にそれでもいいと思うけど」

「もしかして西嶋君、ここまで沈黙だったのも全然気にならなかつたの？」

「え？安在気になんの？そりゃ嫌いな奴とだつたら沈黙は気まずいけど。俺、一緒にいる奴と空間を共有してる空気とか好きなんだよな」

沈黙なんて巽といればほとんどそんな感じだ。

あいつが漫画ばっか読んでるって気もしないでもないが、そうじゃないときでもポツポツ会話してるだけで、ほぼ黙ってるってことがある。

俺と同じで巽も沈黙を楽しめる奴だ。

だから俺とあいつは馬が合うのかもしれない。

「そっか」

安在がふふと小さく笑う。

笑顔が嬉しそうに見えるのは俺の気のせいかな？

なんで喜ぶんだ。

女ってやっぱわからん。

けどそんな彼女を見た俺の胸が小さく跳ねたのは、気のせいなんかじゃないはずだ。

駅まで通学路は生徒が帰り道に買い食いできる駄菓子屋がある。俺と安在がその前を通ったとき見慣れたりリュックが見えた。俺はそれを横目で見つつも通り過ぎる。けれどすぐに安在が気がついた。

「あの、西嶋君？」

「なに？」

「後ろの人……」

「あ、俺のことは気にしないで」

「本人もそう言ってるし　って気になるわあ！巽、おまえ一人で帰るって言ってなかったっけ？」

「一人で帰つてるところにたまたま航平と安在さんが来たんだよ。で、これまたたまたま俺の前を歩いてるだけ。わぁびっくり」

例のごとく棒読みで言われても説得力がない。

「西嶋君のお友達だよな」

「成山巽、18歳。スリーサイズは内緒。よろしく、安在さん。眼鏡かけると女教師みたいでいいよね。いろいろ想像がかきたえられる感じ」

おいこら、そこでグと親指を突き出すな。

「はい、よろしくです。成山君」

で、安在は意味わかってない……と。

天然か、天然なのか？

ベタなギャルゲー設定並みのキャラだったのか。けどその設定、俺も嫌いじゃな……ゴホン。

巽が俺に向かって笑う。

なんだ、その「すべてわかってます」的な生ぬるい目は。

「え？なに安在さん。俺も一緒に帰ってほしいって？わかった。安在さんがそこまで頼むなら一緒にしましょう」

いきなり独り言を言って、すまして俺の隣に並ぶ巽を覗き込むように見上げる安在は、クスと笑って眼鏡の奥の眼差しを俺に向けてきた。

「面白いね、成山君って」

「えと、こいつも一緒にいいの？」

「うん」

「あ、航平。俺、本屋寄っていい？女の子雑誌も置いてあるし安在さんも行きたいよね」

駅前の本屋を目にした巽の足は既にそっちに向かっていている。

「おまえは漫画を買いただけだろうが」

「学校帰りの寄り道は高校までの特権でしょ。満喫しようよ」

「成山君いつも漫画読んでるけど好きなの？」

「漫画は日本の文化でしょう」

本屋に入ると巽は漫画コーナーに一目散に消えた。

俺は安在を見下ろし雑誌の並ぶ棚を指差す。

「あっち安在が読むようなものがあるんじゃないか？」

とはいえ、俺は女の読むファッション誌なんてまるで興味もない。

所在なげに安在の後ろに控えていると、それに気づいたのか棚を移動した彼女は、ふと料理雑誌の前で足を止めた。

「西嶋君、明日お弁当作ってきてもいい？」

「え？」

「それ一緒に食べたいなって思って……だめ、だった？」

「や、俺いっつも学食かパンだから嬉しいけど」

「ホントっ？」

ばあ、と顔を輝かせる彼女に俺の胸がまたしてもドクンと跳ねる。
なんだこの嬉しくてたまらんって顔は。
さっきまでの笑顔も可愛いけど段違いじゃないか。
俺の心臓がドクドクと脈打ち始める。
ヤバイ、これはヤバイぞ。

「あのね。それから今度の日曜日、もし暇だったら一緒に図書館で勉強とか……ほんとに暇だったらでいいの」

「じゃケー番とメアド交換しとく？」

これ以上深入りはやめるともう一人の俺が叫ぶのに、なんで連絡先聞いてんだ！？

どうして携帯を取り出してしまっただ！？

冷静になつて考えろ、俺。

話したこともなかった子と俺がつきあうことになって、しかも彼女はなんかやたらと積極的で、そのうえ俺の言葉にいちいち嬉しそうな顔になるって……ありえないっ！

夢よりありえないだろっ！！
でも。

「いいの！？」

つて、一段と綻ぶ安在の笑顔は現実に俺の目の前にあつて。

「二人して連絡先交換してるの？俺も混ぜてよ。ハイ、安在さん赤外線」

書店の袋を手にほくほくと俺たちのところへ来た巽が素早く携帯を取り出した。

「ちょ、俺のがまだだっつの！」

「え、航平。俺のケー番ゲットしたかったの？早く言ってよ」

「おまえのなんてとづくに知ってるわ！」

「二人ともほんとに仲がいいね」

くすくす楽しそうに安在が笑い出す。

彼女に落ちない男がいたら見てみたい。
なんて可愛い顔で笑うんだろう。
もう嘘でも夢でも何でもいい。
告白してからたった1時間ばかりで、俺は彼女に完全にノックアウトされた。

* * *

次の日学校に行くと、俺と安在がつきあいだしたことは既に広まっていた。

一緒に帰るところを見ていた奴がいたし当然だ。
友達に冷やかされたけど肝心の泰治は俺に何も言っただけだった。
それは俺が約束どおり安在を振ると信じてるからだろうか。

昼休みになって屋上で安在が弁当を広げた。

赤・黄・緑とカラフルな彩りで見るとつまそうだ。

「おいしそうだね」

おい、巽。

その台詞はおまえじゃなくて俺が言うんじゃないか？

「本当？成山君も食べてね。たくさんあるから」

んで、さりげなくおまえのおばさんが作った弁当を俺によこすな。

「体育のあとの空腹ってハンパないんだよね。じゃ、遠慮なく」

「俺より先におまえが食うなよ。っていうかこれは返す。おばさん泣くぞ？」

「だから航平食べてよ。たまには学食やパンじゃなくて手作りのお弁当が食べたいでしょ？」

「俺は安在のを食べる」

「もー、わがままだな。じゃこれは安在さんにあげるね」

「え？わたしが食べるの？」

そこからは異と奪い合うようにして弁当を食べた。

だってうまい。

彼女が作ったからだという欲目を抜きにしても本当においしかった。それを素直に伝えると安在はまた俺が好きになった可愛い笑顔が浮かべた。

聞けば彼女は料理や菓子作りが好きで、大学も家政学科のある大学を目指しているらしい。

「ふーん、じゃ安西さん、航平と志望校離れちゃうね。家政学科のある大学って女子大でしょ？航平、理系に強い大学狙ってるよ。因みに俺は将来ネコ型ロボット作って、ネズミにも負けないストロングキヤットにするつもり」

「西嶋君は理系クラスだしわたしは文系だもん。進学先が違ってるよ。わかってるしそれに」

言いかけて安在は口を閉ざす。

「それに？」

俺が促すと彼女は微かに笑って首を振った。

「ううん。いまから先のこと考えたって仕方ないよね」

もしかして受験に失敗するとかか？

それは笑えないしシャレにならないだろ。

それとも目指す大学のレベルが高くて不安だったりすんのかな？

あ、だから昨日、日曜に図書館で勉強しようって言ってきたのか。てことは色気のカケラもない誘いだってたわけだ。

デートっていうより勉強会だったんだなと俺が勘違いを正したところで、弁当を片付けた安在は次の科目の当番らしく先に教室へ帰っていった。

翻る彼女のスカートの裾を見つめてしまったのは、中が見えかけたからではけしてない。

「いま、もうちょっとだったのになーとか思った？このスケベ」

巽が首に手をかけのしかかってくる。

やめろ、暑い。

「んなわけあるか。つうかおまえどこ見てんだよ。」

「俺も健全な青少年だから。それにしても安在さん。性格悪い子には見えないよね。お邪魔虫の俺がいても嫌な顔一つしないし。

そっか、航平はそこまで愛されていないのか。もしかして航平より俺に惚れた？俺がいい男すぎるばかりに……航平、振られるんだね」俺はグイと巽を押しつけた。

「つきあいだしたばっかなのに縁起でもないこと言うな！」

「木戸にどう言い訳する気なの？」

前置きなく巽に突っ込まれて俺は、う、と言葉を詰まらせた。

「正直に安在さんが好きになったって言って、2、3発ボコられておしまいにすればいいでしょ？」

なんで俺が安在のことを好きになったってこいつにばれてんだ！？

「いや、もうばればれでしょう。6年目のつきあいだからね」巽がしれつと答える。

俺の心を勝手に読んで会話しないでくれ。

ちよっとビビったぞ。

つつか、俺、そんなにわかりやすく顔に出てんのか？
てことは安在の前でも好き好きオーラ出まくり！？
それはさすがに恥ずかしすぎるだろう。

軽く咳払いして俺は表情を引き締めた。

「やっぱ落ち着けどころはそこしかないか」

泰治のことを思い出すと気が重い。

「この学校の七不思議がまた一つ増えたよね。安在さんが航平の彼女になったことにみんな驚いてたし」

「俺、騙されてんのか？」

「いままで誰に告白されてもOKしなかったのは、自分のことが好きだったからって思えばいいんじゃない？」

「そんな自惚れ野郎になりたくない」

ぼん、と巽が俺の肩を叩いて頷いた。

「いまのままでいようね、航平。この先にかあったら骨ぐらいは拾ってもいいよ」

「俺が安在に振られんの前提かよっ」

突っ込みを入れた俺は金網にもたれて空を仰いだ。

「泰治の安い脅しに乗って告って 断られるって思ってたってのは言い訳だろーな」

でも安在がOKするなんて本当にこれっぽっちも思ってたんだ。

「あっちーなあ。衣替え、来週からだっけ」

「そう」

話題を変える俺に合わせて巽が頷く。

安在のことや泰治との約束のことに、これ以上触れないでくれるの
がありがたかった。

きつと俺が本当のことを安在に話せば間違いなく振られるだろう。

けど彼女を好きになってすぐに嫌われるってのはさすがに辛い。
だからもう少しの間だけ夢見てもいいかな。
溜め息が出そうになるのを堪え、俺は眩しい太陽から目をそらした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9030y/>

嘘つきは誰だ

2011年11月29日01時00分発行